

## はしがき

本報告集は、21世紀COE拠点形成プログラム「スラブ・ユーラシア学の構築：中域圏の形成と地球化」のサブプログラム「ロシアの中のアジア / アジアの中のロシア」(Asia in Russia / Russia in Asia 略称 AIRRIA)の2005年度における研究成果の一部を同名タイトルのシリーズ第3集としてまとめたものである。

2003年度に採択された21世紀COE拠点形成プログラムにとって、2005年度は評価機関から「中間評価」をうける時期にあたっており、2007年度末まで5年間にわたる実施期間のいわば中間折り返し点であった。「スラブ・ユーラシア学の構築」も例外ではない。しかし、全体としてこのように定められたタイムスケジュールに沿って活動を展開しつつある当該プログラムの中で、サブプログラム AIRRIAに限っていえば、この年度は折り返し点ではなく、発足後2年半にして早くも実質上の最終年度を締めくくることになった。というのは、その企画と組織に携わってきた筆者が2005年度末の退職によりCOE「事業推進担当者」の構成から外れるという事情があったからである。

21世紀COEは教育重視のプログラムとされる。スラブ研究センター(以下、センター)の教育実績は年数が浅く、北海道大学文学研究科スラブ社会文化論専修(協力講座)の一環として筆者が担当する「博士論文指導特殊演習」も2001年4月にスタートしたばかりであったが、サブプログラム AIRRIAの発足にあたっては「演習」との関連性を強く意識し、その後の展開についても、まずは全学・全国的な場での若手研究者の自己鍛錬と相互交流を可能にするような成果発表・相互討論の場という位置づけのもとに、いわば「演習」の延長として連続セミナーを積み重ねてきた経緯がある。

そうした経緯を踏まえて、2005年度の活動計画としては、「演習」に参加するゼミ生たちが各自の到達点を示す場となるような特別セミナーを開催することを当初から念頭に置いていた。このほか、センターとロシア極東各地のアルヒーフとのあいだに正規の交流実績を作ることに、極東とシベリアから第一線のゲスト・スピーカーを招聘すること、前年度の活動に相当の比重を占めて凝縮された共同研究の成果が期待されるサハリン・樺太史の分野で何らかの集約点を設けることなど、最終年度に片づけようと考えた課題は多かった。結果として、2005年度の活動は前年度にもましてインテンシヴで内容豊富なものとなった。この年度 AIRRIA が関わった事業項目を以下に列挙する。

[1] スラブ研究センター夏期国際シンポジウムの前日企画として開催した SES-COE 特別セミナー「ロシア極東—歴史的パースペクティブのなかで」(2005年7月6日)

[2] AIRRIA 第10回研究会(2005年6月11日)、第12回研究会(2005年10月8日)として開催した2回の定例的なセミナー

[3] AIRRIA 第11回研究会(2005年9月21日)、第13回研究会(2005年12月3日)と

して開催した2回のサハリン・樺太史セミナー

[4] 日ロ共同開催の国際シンポジウム「日本とロシアの研究者の目から見るサハリン・樺太の歴史（Ⅰ）」（サハリン国立大学、2005年11月1～2日）、「日本とロシアの研究者の目から見るサハリン・樺太の歴史（Ⅱ）」（北海道大学、2006年2月16～17日）

[5] 総括の場として年度末に開催した「ロシアの中のアジア/アジアの中のロシア」研究会特別セミナー（2006年3月18～19日）

このように盛り沢山となった事業展開は、追加予算の配分と獲得によってはじめて可能となった。[1][2][5]は21世紀COE予算の配当をうけて組織したセミナーであるが、外国から複数のパネリストを招聘した[1]と[5]、とくに2日間（前日企画を含めれば3日間）にわたる事実上大型のシンポジウムとなった[5]の開催については、特段の配慮に基づいて規模の大きい別枠予算が配分された。一方、[3][4]は、21世紀COE予算以外の追加的な財政支援の必要性から年度途中で学内申請したプロジェクト研究「北海道とサハリン州：相互理解に資する歴史記述を求めて」に対して、北海道大学から2005年度重点配分経費の支援を得て実現したセミナーとシンポジウムである<sup>1</sup>。

上記のうち[1]と[5]に焦点を絞り、前者（以下、7月特別セミナー）における外国人パネリストの露文ペーパー2本の日本語訳と、後者（以下、3月特別セミナー）のうち日本語による3つのセッションに提出されたペーパー7編を収録し<sup>2</sup>、Ⅰ～Ⅳの4部に分けて編集したのが本報告集である。

Ⅰ「開かれたアルヒーフとアルヒーフから甦る世界」は、A. A.トロポフ（ロシア国立極東歴史文書館館長）の「ロシア極東アルヒーフの地域史研究への参画」、H. A.トロイツカヤ（同副館長）の「ロシア極東アルヒーフ文書における日本と日本人」から構成されている。7月特別セミナーには、第3のペーパーとして張宗海（黒龍江省社会科学院歴史研究所所長）の「ロシア極東への中国人移民問題：実態と歴史」も提出されたが、ここでは割愛した。

日本のロシア極東史研究において、1980年代後半にはじまる現地研究機関・諸大学との研究交流は、すでに相当の蓄積を重ねてきた。そうしたなかで、日本の研究者によるロシア極東の地方アルヒーフ利用も始まっているが、しかしそれは今なお散発的であり、アルヒーフを相手方とする研究交流については意外なほど等閑にされてきた。1990年代半ば以

<sup>1</sup> 「サハリン・樺太の歴史」を主題とするプロジェクト研究に重点配分経費を申請するにあたっては、サブプログラムAIRRIAを共通の基盤としながら、そこからの「株分け」を図り、北海道大学のいわば得意分野としての今後の展開の基礎づけを意図した。そうした経緯を考慮して、便宜上COEの刊行物も別立てのシリーズとした。参照、『21世紀COE研究報告集』No. 11（『日本とロシアの研究者から見るサハリン・樺太の歴史（Ⅰ）』2006年2月）。第1回シンポジウムの記録は同報告集と、История Карафута глазами сахалинских и японских исследователей. Южно-Сахалинск, 2006.の形で日ロ同時に刊行された。

<sup>2</sup> ロシア語によるセッションⅡ「『満蒙問題』の歴史的底流」とセッションⅢ「アジア・ロシアと在外ロシア」に提出されたペーパー4編は別途に刊行される。

後ロシア極東の基幹アルヒーフとして新たに開かれたロシア国立極東歴史文書館（РГИА ДВ）のアーキヴィストを日本に招聘することにより、ロシア極東史、ロシアとアジア諸国の国境を跨ぐ地域史という領域で、若手研究者も交えた研究交流のレベルアップを図り、よりシステマティックなアルヒーフ利用に道を開くこと。これが 7 月セミナーの眼目の一つであった。

トロポフ論文は、第二次大戦中シベリアに疎開した文書館資料を基にしてトムスクに設置されたロシア共和国中央国立極東アルヒーフ（ЦГА РСФСР ДВ）が 1990 年代半ば以後ウラジオストクに返還され、РГИА ДВ として再開されるに至った経緯とともに、収蔵資料の特徴、運営上の問題、内外からの利用状況を含む同アルヒーフの現状について、詳細に報告している。

トロイツカヤ論文は、同アルヒーフ所蔵資料の一端を紹介しながら、19 世紀中葉から帝政崩壊直前までのロシア帝国東部を舞台とした日本人居留民の日常生活、企業活動、外交官の活動、民族間関係など、多岐にわたる諸相の生き生きとした具体像を提示している。

翻訳は、トロポフ論文を左近幸村（北海道大学文学研究科大学院生）、トロイツカヤ論文を有泉和子（東京大学史料編纂所学術研究支援員）が担当し、筆者が校閲した。ちなみに、本報告集に訳出・掲載するトロイツカヤ論文のオリジナルは、トロポフ館長のスラブ研究センター訪問記とともに、2005 年にウラジオストクで刊行された РГИА ДВ の紀要第 9 輯に掲載されている<sup>3</sup>。ロシア極東のアーキヴィストたちが日本との学問的・実務的な協力関係の強化に力をいれていることは、ここからも明らかである。

II 「国際環境変動期の北東アジア」は、3 月特別セミナーのセッション I における 3 報告のうち、神長英輔（日本学術振興会特別研究員）の「戦争と漁業：『北洋漁業』を問い直す」と高尾千津子（早稲田大学講師）の「アブラハム・カウフマンとハルビン・ユダヤ人社会：日本統治下ユダヤ人社会の一断面」を収録する。

3 月特別セミナーのこの部分は、もともと「ロシア革命後の北東アジア」というセッション題名をつけていたが、この題名に最も親和的な内容を伴ったユ・ヒョジョン（和光大学）の興味深い報告「コミンテルン極東書記局の成立過程：ソヴィエト・ロシア、コミンテルンと東アジアの革命運動」は、他に掲載予定があるとして固辞された関係で残念ながらここに収録しない。その絡みもあって、括りの名称を少々変えた。

神長は近年、AIRRIA 第 2 回研究会（2004 年 1 月）と第 7 回研究会（同年 10 月）、2005 年度ロシア史研究会大会（2005 年 10 月）などの場で、一貫して「北洋漁業」史の構築を進めてきた<sup>4</sup>。本報告集に掲載する論文はこれに連なるもので、日露戦争後とロシア革命後と

<sup>3</sup> *Торопов, А. А.* Визит делегации Российского государственного исторического архива Дальнего Востока в Японию // Известия Российского государственного исторического архива Дальнего Востока. Вып. 9. Владивосток, 2005. С. 38-44; *Троицкая Н. А.* Япония и японцы в документах РГИА ДВ // Там же. С. 45-67.

<sup>4</sup> 参照、神長英輔「プリアムール総督府管内における漁業規制と漁業振興 1884—1903」『ロシア

いう日本の露領漁業の二つの躍進期を取り上げ、前者における「国家的権益」、後者における「自衛出漁」の通説、それらに共通する「北洋」言説の批判を通して、「北洋漁業」の歴史の問い直しを主張している。

高尾は、ロシア帝国とソ連のユダヤ人問題の歴史について精力的に考察を進め、2004年度ロシア史研究会大会（2004年10月）の共通論題「歴史学と地域研究」の報告では、ノヴォロシヤを中心とするロシア帝国のユダヤ人定住地域に焦点をあてたが<sup>5</sup>、本報告集に掲載する論文では、中国東北（以下、満洲）、とくにロシアからの移民・移住者が集中した国際都市ハルビンに視点を移し、ユダヤ人医師アブラハム・カウフマンの足跡を辿りながら、19世紀末のロシア帝国による北満洲の植民地化から1945年ソ連軍の満洲侵入まで約半世紀間ハルビンに存続したユダヤ人ディアスポラの歴史において満洲事変後の日本による満洲植民地統治が持った意味を問い直している。

神長は海域史、高尾はユダヤ人史と、専門領域を異にしながら、日露戦争後、ロシア革命後、満洲事変後という変動期において北東アジアの個別の海域や地域が帯びた国際関係の磁場の力学に注意を喚起している点は共通する。これまで AIRRIA の連続セミナーは、ロシア / アジアの接壤地に焦点をあて、そこに孕まれた日露戦争後、ロシア革命後、満洲事変後、さらに第二次大戦後の変動期における政治、経済、文化の諸問題を何度も取り上げてきた<sup>6</sup>。Ⅱに収録する神長、高尾の両論文はこのような広がりの中にそれぞれの位置を占める仕事として評価されよう。

Ⅲ「トランスボーダーの人流」は、3月特別セミナーのセッションⅣに提出された2編のペーパー、塚田力（北海道大学文学研究科大学院生）の「中国領アルタイの古儀式派：国連難民高等弁務官事務所資料を中心に」と倉田有佳（同）の「トランスボーダーの人流：1930年代初頭ロシア極東から北海道に避難・脱出した事件を中心に」を収録する。

塚田は、ロシア・ソ連を脱して中国領に移住したロシアの宗教的少数者に関心を集中し、AIRRIA の連続セミナーでは、第2回研究会（2004年1月）で新疆ウイグル自治区、第8回研究会（同年12月）でホロンバイル盟の正教古儀式派について報告した<sup>7</sup>。これにつづく本報告集の論文は、中国領アルタイにかつて存在した古儀式派コミュニティをジュネーブ

---

史研究』No. 73（2003年10月）、同『『北洋』とは何か—再構築された漁業史と対露観』『21世紀 COE 研究報告集』No. 3（2004年7月）、など。

<sup>5</sup> 高尾千津子「地域問題としての『ユダヤ人問題』」『ロシア史研究』No. 76（2005年5月）。

<sup>6</sup> 上田貴子「Харбин からハ爾濱へ：中国における国際都市の試み」（報告要旨は『ロシアの中のアジア/アジアの中のロシア研究会通信』[以下『通信』] No. 1、2003年12月）、中嶋毅「ハルビンのロシア人教育：高等教育を中心に」『21世紀 COE 研究報告集』No. 3（2004年7月）、上田貴子「ハルビン 1945年8月—1946年9月」（報告要旨は『通信』No. 3、2004年4月）、田淵陽子「1945年東アジア国際関係と『内モンゴル人民共和国臨時政府』」（同）、など。

<sup>7</sup> 塚田力「中国新疆ウイグル自治区におけるロシア系住民の宗教活動」（報告要旨は『通信』No. 2、2004年3月）、同「中国ホロンバイル盟の正教古儀式派（1920—1950年代）」（報告要旨は『通信』No. 8、2004年12月）。

にある国連難民高等弁務官事務所文書館の資料にまで当たって調べた報告である。中国のロシア正教古儀式派コミュニティとしては、ロマノフカ村など旧満洲の村落が古くから日本に紹介され、比較的よく知られていたが、塚田による上記 3 地点の調査はその空白を埋め、ロシア人ディアスポラの歴史に新たな知見を付け加えるものとなっている。

倉田論文も、ロシア域外に脱出した難民の歴史の空白を埋める。近年日本で盛んになってきた来日ロシア人の歴史研究では、時期的対象としては主としてロシア革命後、関心の対象としてはどちらかといえば名の知られた人物に焦点をあて、その埋もれた事績の再評価を意図するものが多かった。倉田自身、AIRRIA の連続セミナーでは「サハリン・樺太の歴史」を特集した第 5 回研究会（2004 年 7 月）、ついでサハリン・樺太史に関する第 2 回国際シンポジウム（2006 年 2 月）の場では、日露戦争時サハリンで義勇兵を率いたこともある漁業家フリサンフ・ビリチの数奇な運命について報告した<sup>8</sup>。しかし、本報告集で倉田が焦点をあてるのは、1930 年代スターリン体制下のソ連から日本（主として北海道）に避難・脱出した無名の人びとである。倉田は、1932 年 10 月沿海州から帆船などによって北海道・樺太西海岸に相次いで辿り着いたソ連人の漂着事件に早くから注目し、ソ連函館領事館の対応、在日日系ロシア人グループの動向などについて興味深い事実を発掘していたが<sup>9</sup>、今回の論文では、そうした事件の多発と時間的・地理的広がりが検証されている。

北東アジアにおける「トランスボーダーの人流」というテーマのうち、中国、朝鮮、日本を送出国とし、ロシア極東を受け入れ先とする移民・移住に関しては長い研究史があり、2005 年度の AIRRIA の「定例の」セミナーでも取り上げられて新たな展開がみられた<sup>10</sup>。一方、ロシアを送出国とする逆方向の移民・移住の流れによって形成された在外ロシア人コミュニティの研究も近年ロシアで急速に活況を呈している<sup>11</sup>。Ⅲに収録する塚田論文と倉田論文は、逆方向の移民・移住の主流から外れた比較的目に付きにくい部分に光をあてることで、移民・移住史に一石を投じている。両論文とも、残存する資料の新たな発掘はほとんど期待できないかもしれないが、ロシア側・中国側アルタイの双方に跨る古儀式派住民の関係なり、沿海州住民を避難・脱出に駆り立てた送出元の状況との関連性なりがより深く解明されれば、いっそう興味深い研究となることは疑いない。

<sup>8</sup> 倉田有佳「Kh・P・ビリチの生涯：20 世紀初頭のロシア極東と日本」（報告要旨は『通信』No. 5、2004 年 8 月）、同「Kh・P・ビリチ（1857－1923）の生涯から：流刑地サハリン・日露戦争」『21 世紀 COE 研究報告集』（『日本とロシアの研究者から見るサハリン・樺太の歴史（Ⅱ）』、近刊）。

<sup>9</sup> 倉田有佳「1930 年代はじめのソ連極東から日本への脱出・漂流者」『地域史研究はこだて』No. 28（1998 年）。

<sup>10</sup> 上田貴子「東北アジアにおける華僑：極東ロシアに向かった人々を中心に」（報告要旨は『通信』No. 10、2005 年 9 月）、サヴェリエフ・イゴリ「移民と移民受入政策：極東ロシアにおける東アジアからの移民（1860～1917）」（報告要旨は『通信』No. 11、2006 年 3 月）、など。

<sup>11</sup> 3 月特別セミナーにウラジオストクから招聘した A. A. ヒサムトディオフ（極東国立工科大学）は在外ロシア研究の業績で知られている。Хисамутдинов А. А. Российская эмиграция в Азиатско-Тихоокеанском регионе и Южной Америке: библиографический словарь. Владивосток, 2000; Он же. Российская эмиграция в Китае. Опыт энциклопедии. Владивосток, 2002.

IV「トランスボーダーの地政学」は、3月特別セミナーのセッションVに提出された3編のペーパー、麻田雅文（北海道大学文学研究科大学院生）の「中東鉄道警備隊と満洲の軍事バランス：1897-1907年」、左近幸村（同）の「スンガリ川、アムール川の穀物輸送とロシアの植民問題：1907-1913年」、天野尚樹（同）の「極東における帝立ロシア地理学協会：サハリン地理調査を手がかりとして」を収録する。

麻田は、清国の領土上にロシア帝国によって敷設され、満洲をT字型に横断・縦断する中東鉄道の建設史、初期の鉄道経営史をテーマに選んで2006年1月に修士論文を提出した。本報告集の麻田論文はその副産物で、軍事史の観点から中東鉄道警備隊の形成と義和団反乱鎮圧、日露戦争従軍、ポーツマス条約以後の満洲の軍事バランスなどを論じる。

北東アジア国際関係における満洲の地政学的重要性はつとに指摘されてきた。しかしその割にロシア語・中国語の資料・文献を駆使した実証研究は意外に少ない。たとえば、ロシアで本格的な「義和団戦争」研究が現れたのは、ようやく近年のことである<sup>12</sup>。英訳もあるB. A. ロマノフの古典的著作『満洲におけるロシア』にいつまでも依拠する状況が続いてきたことを思えば、麻田の中東鉄道研究は従来の沈滞を打破する新たな研究動向として、ロシア史研究者だけでなく、中国史研究者からも歓迎されるであろう。

同じことは、日露戦争後における北東アジアのトランスボーダーな経済関係を解明しようとする左近の仕事についてもいえる。左近が近年追求するテーマは、自由港廃止問題、露中国境貿易をめぐる問題である。AIRRIA第6回研究会（2004年8月）、2005年度ロシア史研究会大会（2005年10月）などの場でこの問題の検討を深めてきて<sup>13</sup>、本報告集の論文ではアムール水系を介しての穀物輸送に焦点をあてている。満洲からロシア極東への穀物輸送は、外交政策、関税政策だけでなく、国内問題としての地域政策のあり方とも絡み、内・外政の一体的な運営をめぐるのは帝国中央の問題とも絡む。その意味で深く追求すれば重要な論点を引き出しうるテーマである。ただ、ロシア帝国の貿易統計のうち、アジア部については通関当局による捕捉度が低かったことも考えられ、実態把握が必ずしも容易でない領域に属している。

北東アジアのトランスボーダーな経済関係の解明には、同時に、ロシア極東の接壤地域の歴史的発展構造、ロシア極東と隣接諸国とのあいだの商品・貨幣流通、移民・移住などについての幅広い知識が必要とされることも明らかであろう。AIRRIAの連続セミナーでは、これらの問題を検討して顕著な研究を発表しつつある新進の研究者たちの仕事に接する機会をもった。第10回研究会（2005年6月）における石川亮太（佐賀大学）、第12回研究会

<sup>12</sup> 3月特別セミナーに招聘したB. Г. Давышён (クラスノヤルスク国立教育大学)はこの動向を代表する歴史家である。参照、*Дацышен В. Г. Боксерская война. Военная кампания русской армии и флота в Китае в 1900-1901 гг. Красноярск, 2001.*

<sup>13</sup> 左近幸村「20世紀初頭のロシア極東における『ロシア化』政策」(報告要旨は『通信』No. 6、2004年9月)、同「露中国境の自由貿易地帯：その廃止を巡って」『ロシア史研究』No. 77 (2005年12月)、など。

(2005年10月)における荒武達朗(徳島大学)の報告などがそれである<sup>14</sup>。IVの左近論文からは、アジア史研究者の刺激に満ちた新動向に触発された形跡が明白に窺える。より一般的にいえば、次世代のロシア史研究者とアジア史研究者のあいだに問い掛けと応答の相互触発関係を形成したこと自体がサブプログラム AIRRIA の研究活動の大きな成果であった。

最後にIVの天野論文は、帝立ロシア地理学協会のサハリン地理調査を手がかりに、帝国と地理学という複合的かつ世界史的なテーマに切り込もうとする。天野は、AIRRIAの連続セミナーでは第5回研究会(2004年7月)と第8回研究会(同年12月)、またサハリン・樺太史に関する第2回国際シンポジウム(2006年2月)などの場で、主として同時代資料の言説分析に基づく「心象地理」の解明という際立った方法により、帝政期ロシアのサハリン島をめぐる認識を俎上に載せる一連の研究を発表してきた<sup>15</sup>。本報告集の天野論文は、帝立ロシア地理学協会の機構の歴史や、そこにおける「思想の帝国性」の体现のされ方も分析対象としている点が新しく、ロシア帝国論の再検討に貢献する切り口として同協会を取り上げることの有効性が示されている。しかし、他ならぬその理由によって、論文の掲げる主題の地理的広がりからしても、例示としてのサハリン地理調査に限定されない、より本格的なロシア地理学協会の研究が期待されるであろう。

「ロシアの中のアジア / アジアの中のロシア」(Asia in Russia / Russia in Asia)というタイトルは、筆者も参加した1994年プリンストン大学のワークショップに基づく論文集“Rediscovering Russia in Asia”<sup>16</sup>から着想した。このタイトルに示されるような問題領域で教育研究プログラムを組織することができれば、という願望に似た構想を抱くようになったのは、COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」が採択された2003年秋よりも少し前に遡り、2001年度「博士論文指導特殊演習」の担当をはじめたとき以来である。ロシア史に軸足を置きながら、しかしロシア史に自閉することなく、境界を跨ぎ(トランスボーダー)、地域間の関係性にこだわる(トランスナショナル)地域史研究。AIRRIA第5回研究会(2004年7月)とサハリン・樺太史に関する第2回国際シンポジウム(2006年2月)に参加した地理学の専門家、三木理史(奈良大学)の表現を借りれば「区切る地域史研究

<sup>14</sup> 石川亮太「20世紀初頭の満洲・朝鮮におけるロシア通貨の流通」(報告要旨は『通信』No. 10、2005年6月)、荒武達朗「19世紀後半-20世紀初頭北満洲をめぐる漢民族移住の進展とその変容：“辺境”像の再検討」(報告要旨は『通信』No. 11、2006年3月)。なお、以下も参照。石川亮太「近代東アジアのロシア通貨流通と朝鮮」『ロシア史研究』No. 78(2006年5月)、荒武達朗「1870-90年代北満洲における辺民貿易と漢民族の移住」『アジア経済』46巻8号(2005年8号)、など。

<sup>15</sup> 天野尚樹「ロシアの範囲：19世紀後半におけるロシア人のサハリン認識」『21世紀COE研究報告集』No. 5(2004年12月)、同「帝政期ロシアの領域認識：心象地理のなかのサハリン」(報告要旨は『通信』No. 8、2004年12月)、同「1905年におけるA. A. パノフのサハリン言説」『21世紀COE研究報告集』(『日本とロシアの研究者から見るサハリン・樺太の歴史(II)』、近刊)。

<sup>16</sup> Stephen Kotkin and David Wolff (ed.), *Rediscovering Russia in Asia: Siberia and the Russian Far East*, Armonk, N. Y.: M. E. Sharpe, 1995.

から括る地域史研究へ<sup>17</sup>」。これが筆者の担当する「演習」の基本的スタンスであった。当初漠然と抱いていた願望のような構想が、サブプログラム AIRRIA の発足から実質上2年半の活動期間を経て、『ロシアの中のアジア / アジアの中のロシア』と銘打った3冊目の報告集の刊行に結実したことをこの間の研究会活動に報告者、コメンテーター、フロアの聴衆として参加して下さったすべての皆さんとともに喜びたい。

2006年9月

編集者

原 暉之

---

<sup>17</sup> 三木理史「戦間期樺太における朝鮮人社会の形成：『在日』朝鮮人史の空間性をめぐって」『社会経済史学』68巻5号（2003年1月）、27ページ。